

# シノドスへの歩み みことばと共に 復活節第三主日C年

小西広志

2022年5月1日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年5月1日、復活節第3主日となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

## 喜ぶ

第一朗読はペトロを代表とする使徒たちが大祭司らによって捕らえられ、尋問を受けて、それに対する答えの部分です。

41節にある「それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行った」の「喜ぶ」に注目してください。新約聖書の中で、喜びはイエスさまとの関わりを通じて生じます。占星術の学者たちはメシアの誕生を告げる星を見て喜びます（マタ2章10節）。イエスさまが行う奇跡を見て人々は喜びます（ルカ13章17節）。帰ってきた息子を迎えて父親は喜び（ルカ15章32節）、死んだと思っていたイエスの復活に出会って弟子たちも喜びます（ヨハ20章20節）。「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」（ロマ12章12節）、「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」（フィリ4章4節）とパウロが勧め、励ますのは、イエスさまとの関わりの中で喜びを得ることを意味しているのです。イエスさまの復活の証人として、イエスさまの名の故に辱めを受けた使徒たちは、イエスさまとの深い関わりの中に入れていただいたことで、大きな喜びを味わうのです。

## 礼拝する

第二朗読ですが、『黙示録』では5章は「屠られた小羊」への賛美の箇所となります。その冒頭に「玉座に座っておられる方の右の手に巻物」があったと記されています。そして、「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者はだれか」と天使の声がします。しかし、巻物を開き、それを見ることのできる者は一人もいませんでした。それから、「小羊は進み出て、玉座に座っておられる方の右の手から、巻物を受け取り」ます。その小羊は「巻物を受け取り、その封印を開くのにふさわしい方です」と「新しい歌」が歌われます。13節で「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように」と天使たちが賛美の声をあげます。この声は地上の教会のわたしたちの賛美の声と重なっていきます。「長老たち

はひれ伏して礼拝した」(14 節)とありますが、「礼拝する」の元々の意味は「前に」プロ+「接吻する」キュネオーだそうです。誰かの前にひれ伏してその足、その衣のふち、地面などに接吻することを指します。礼拝する主体が天使たちだけでなく、天の玉座を取り囲む長老たちにも広げられている点は興味深いです。

## イエスだとは分からなかった

福音朗読ですが、『ヨハネによる福音書』21 章からです。この箇所はガリラヤでのイエスの出現と、それに関する出来事を記述しています。おそらく、ヨハネの弟子たちであった編集者があとから聞いたことを書き加えたと考えられています。

4 節に注目してください。岸に戻ってきた夜明け頃、イエスさまが岸に立っていますが、それが分かりません。他の復活のイエスさまが現れた物語と同じです(湖上の顕現：マコ 6 章 49 節、マグダラのマリアへの顕現：マコ 20 章 14 節、エマオへの道での顕現：ルカ 24 章 16 節、パウロへの顕現：使 9 章 5 節)。復活したイエスさまを知ることが出来るのは、イエスさまとの関わりの中でなされることを意味しています。復活したイエスさまは霊的な人格ですから、復活したイエスさまからの語りかけ、あるいは何らかの働きかけを通じて分かるのです。そこで次節の「子たちよ、何か食べる物があるか」が生きてきます。舟はまだ岸についてはいないのでしょう。岸の方からイエスさまが語りかけられるのです。ちなみに「何か食べる物」はギリシア語でプロスハギオンですが、もともとはパンに添えて食べる副食の意味だそうです。新約聖書ではここだけに登場します。

## まとめ

『ヨハネによる福音書』には「知る」とか「分かる」という表現がたくさん出てきます。先ほどあげた 4 節の「それがイエスだとは分からなかった」もそうですし、12 節でも「弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」ともあります。どうやら、わたしたちが考えている以上に「知る」、「分かる」には深い意味があるように思います。

なんと表現したらよいのでしょうか。つまり「関わりがある」とか「つながっている」のような内容です。今日の福音でお弟子さんたちは復活したイエスさまと一緒に食事をして、この方がどなたであるかが分かりました。つまり、復活したイエスさまとの関わりの中に入れていただいたのです。

先々週の復活の主日の福音ではペトロと愛する弟子は「見て、信じ」ました(20 章 8 節参照)。さらに先週の福音では「見ないのに信じる人は、幸いである」(29 節)とイエスさまはおっしゃって「聴く」こと、特に共同体のメンバーによる復活の証言に耳を傾けることが強調されました。

今日の福音では、イエスさまの側から関わります。声をかけます。そこに生まれたのは復活したイエスさまとの人格的なつながり、交わりです。人格的な交わりを通じて、信じる者にさせてもらえるのです。

教会というのは「交わり」が生まれる場所です。しかも、その交わりは自分のすべてをかけた交わりです。つまり人格的な交わりです。相手を利用するのでもない、相手に利用されるのでもない、相手を支配するのでもない、相手に支配されるのでもない、そんな関係が結べるのが教会です。しかも、文化や言語や人種を超えた交わりが生まれるのが教会です。そして、教会で人格的な交わりを体験したからこそ、その交わりをたずさえて、人を人とも思わない、神の被造物を被造物とも思わない、殺伐としたこの世に対して、わたしたちは人格的な深い交わりをつくろうと努力するのです。それが福音宣教です。

それではまた来週。